群教セ	G01 - 02
	平 17.228 集

説明的な文章を正しく読む力をはぐくむ指導の工夫
――「読みの手引き」の作成と活用を通して――

特別研修員　　藤井　久子　（高崎市立塚沢小学校）

《研究の概要》
本研究は、説明的な文章を読むことの学習において、「読みの手引き」を作り、活用することを通して正しく読む力をはぐくもうとしたものである。「読みの手引き」を作り、読み方を考え意識付け、読み取りの過程で学習のめあて・手引きとして活用し記述に残す。まとめの過程で学習のめあて・手引きを流れに沿って整理し、「読みの手引き」を使った読み方が分かるようになることで、説明的な文章を正しく読む力をはぐくもうとした。
キーワード　【国語－小　読むこと　説明的な文章　正しく読む力　読みの手引き】

Ⅰ　主題設定の理由

本校の子どもの傾向としていわゆる読解力の不足を感じる場面が多い。どの教科においても教科書や資料などの文章を書かれたとおりに正しく読むことは必要である。図書館の貸し出し数は年間で一人平均 50 冊を越え､保護者による読み聞かせなども活発に行われている。子どもたちは筋を追って楽しみながら読むことや、想像を膨らませながら読むことが好きで、読書の傾向は物語的なものが多い。しかし、調べ学習での資料の読み取りやWeb ページの活用の様子などからは一つ一つの言葉の意味を考えて理解する、図や表を読み解く、文章構造を意識して筆者の主張をつかむ、といった読みは不十分であることが分かる。国語の学習に対しても文学的な文章に比べて説明的な文章に魅力を感じない子どもが多い。

説明的な文章の学習において子どもたちは何が分かればいいのか、そのためにはどう読めばいいのかを意識せずに読んでいることが多い。低学年での「Ｃ読むこと」の指導は、時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むことがなされてきた。学習指導要領第３学年及び第４学年の「Ｃ読むこと」の内容のイには「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと」とある。説明的な文章を読む学習において、順序という視点に加えて、中心となる語や文をとらえることや段落相互の関係を考えることという新しい視点が加わる。この時期に説明的な文章を読む視点を意識させ、何が分かればいいのか、そのためにはどう読めばいいのかという読み方を身に付けることは、正しく読む力を育てる上でたいへん重要である。

本研究では、説明的な文章を｢読むこと｣の学習で子どもたちによる｢読みの手引き｣作りを取り入れることにした｡教科書の学習のてびきを踏まえ、既習の学習を参考にして｢読みの手引き｣を作り、活用する。｢読みの手引き｣を作ることは、説明的な文章を正しく読むとはどういうことかを考えることである。今までの学習を振り返り、どんな読み方をしてきたのか、どんな読み方をすればいいのかを考え、学習の流れを予想することである。また、｢読みの手引き｣を活用することは、学習のめあてに合った手引きを選んで使ったり、新たに付け加えたりしながら読み進めることであり、適切な読み方を探し出し身に付けていくことである。さらにまとめの過程において、学習のめあてに対して役立った手引きを学習の流れを確認しながら整理することで、それぞれのめあてに対する読み方が分かり、説明的な文章を正しく読む力をはぐくむことができると考える。

以上のことから、説明的な文章で｢読むこと｣の学習において｢読みの手引き｣を作り、活用することが、正しく読む力をはぐくむ上で有効であると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

説明的な文章を「読むこと」の学習において、子どもたちが｢読みの手引き｣を作り、活用することが、正しく読む力をはぐくむ上で有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

1　つかむ過程において、教科書の既習の「学習のてびき」を踏まえて、子どもたちが「読みの手引き」を作成することで、説明的な文章の学習の流れをつかみ、説明的な文章を正しく読む上でどのように読むことが必要か考えるようになるであろう。

2　深める過程において、「読みの手引き」の項目を学習のめあてに合わせて手引きとして活用することや、付け加える項目を考え出すことで、めあてに合った適切な読み方があることを理解していくであろう。

3　まとめる過程において、手引きとして活用した項目を学習のめあてと関連付けて整理し、学習の流れに沿ってとらえ直すことで、「読みの手引き」の活用の仕方が分かり、説明的な文章を正しく読む力をはぐくむことができるであろう。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

(1)　説明的な文章を正しく読むことについて

説明的な文章を正しく読むとは、文章に記されている内容について何が書かれているかを理解することと、文章がどう書かれているかという構成をつかむことの両方を行うことである。別々に行うものではなく、相互にかかわらせながら相乗的に行われるものであり、文章だけでなく表や図、写真や絵なども含めて理解することである。これらのことを通して筆者が何を言うためにどう書いているかを理解できると考える。

具体的には学習指導要領に記される「読むこと」の内容イの事項の達成を中心に指導する。例えば小学３年生としては、中心となる語や文をとらえられること、段落相互の関係を考えられること、指示語の内容を正確につかむこと、接続語の働きが分かることなどを学習する。これらを互いにかかわらせながら、その文章には何がどう書かれているのか理解できたときに説明的な文章が正しく読めたと考える。そのために形式段落に番号を付ける、何度も出てくる言葉に印をする、大段落に分ける、図にまとめる、国語辞典を使って意味の分からない言葉を確かめる、といった学習活動を考え出したり、それらを選んで活動できたりすることが、正しく読む力をはぐくむことだと考える。

(2)　「読みの手引き」の作成について

「読みの手引き」作りは、その教材を読むためにどんな学習活動をすればいいかを予想することであり、説明的な文章の読み方を自分たちで考える学習である。教科書の単元の目標や既習の学習のてびきを準備しておき、学習経験も参考にして様々な方法を考えさせる。子どもたちから出される「間違わずに音読する」「分らない言葉を辞典で調べる」「形式段落に番号を付ける」「大事な段落を探す」「形式段落の始めの言葉に気を付ける」「題名に気を付ける」などを学習の流れを確認しながら B5 版のプリントに手引きの項目としてまとめる。その際、空の行を作り、読み進めながら必要な項目は付け足せるようにしておく。これを台紙に貼り付けて使い、順次貼り重ねていく。

手引きの項目を考えることで、説明的な文章の読み方を意識することができ、授業を予想して使えるものにしていく活動を通して、手引きの項目の中に学習のめあてにもなる項目のあることに気付き、学習の見通しがもてるようになると考える。

(3)　「読みの手引き」の活用について

授業では、プリントの項目を学習のめあてと手引きとして活用する。例えば「大事な段落を見付ける」という項目を学習のめあてとすれば、「つなぎ言葉に注意する」「形式段落のはじめの言葉に気を付ける」という項目は手引きとして役立つ。また、「大事な言葉を探す」というのを学習のめあてとすれば、「題名に気を付ける」「何度も出てくる言葉に気を付ける」という項目などが手引きとなる。適当な項目がない場合は、必要なものを考え、付け加えていく。授業ごとに読み取った内容ではなく、読み方に視点を当てて振り返りとして記述する。これによって学習のめあてと手引きを結び付けてとらえることができ、目的に合った読み方に気付けるようになると考える。

まとめの過程では、ワークシートを使い、「登山地図」というかたちで学習を振り返る。これは学習の流れに沿って学習のめあてを確認し、実際に役立った手引きを道しるべに見立てて書き直す作業である。この作業により、手引きを学習のめあてと関連付けてとらえ直すことができる。このことにより、説明的な文章での目的に合った適切な読み方が分かり、正しく読む力をはぐくむことができると考える。

2 研究の方法

(1) 授業実践計画

対象	高崎市立塚沢小学校 ３年２組 38 名	期間	平成 17 年 11 月上旬 （10 時間）	単元名	まとまりやつながりに気をつけよう 「広い言葉、せまい言葉」(教出３年下)
目標	「読みの手引き」(「説明文を読んじゃおう」) を作成し、学習の過程に沿って手引きとして使いながら、広い言葉とせまい言葉の関係をつかみ、文章を正しく読む。				

(2) 検証計画

	検証項目	検　証　の　観　点	検　証　方　法
見通し1	つかむ過程	「読みの手引き」を作ることは、「広い言葉、せまい言葉」の学習の流れをつかみ、正しく読むためにはどのように読むことが必要かを考える上で有効であったか。	「読みの手引き」作りの過程で説明的な文章の読み方を意識し、「広い言葉、せまい言葉」に適した項目を考えているか、短冊の記述内容から分析する。
見通し2	深める過程	「読みの手引き」を手引きとして活用することは、中心となる語や文をとらえ、内容の理解のために適切な読み方があることを理解する上で有効であったか。	「読みの手引き」の項目が中心となる語や文をとらえるための手引きとして適切に活用され、内容の理解に役立っていたか、振り返りの記述内容から分析する。
見通し3	まとめる過程	「読みの手引き」の項目からめあての解決に有効だったものを選択し、学習の流れに沿って整理することは、説明的な文章を正しく読む力をはぐくむ上で有効であったか。	学習の流れに沿っためあてと手引きが分かることで、説明的な文章を正しく読む方法があることに気付いているか、ワークシートの記述内容から分析する。

(3)抽出児童

A (男)	言語力に優れ語彙も豊富で、書かれた内容を文章に沿って理解することができる。説明的な文章の読み方の意識は指示語に対する注意だけである。手引きに興味をもたせ説明的な文章の読み方をつかませたい。
B (女)	音読では声が小さくなったり、まちがいを読み直したりすることが多い。教科書の漢字表記には自主的に読み仮名を付けている。手引きを使う読みの方法のよさに気付かせたい。

V 研究の展開

1 評価規準

国語への関心・意欲・態度	読　む　能　力	言語についての知識･理解・技能
○学習のめあてに対する「読みの手引き」を選択して活用し、言葉の意味の広がりを読み取ろうとしている。	○学習のめあてに対して「読みの手引き」の項目を付け足したり選んだりして読んでいる。 ○言葉の意味の広がりについて中心となる言葉を押さえて理解している。	○「」の付いた言葉が中心語句となっていることに気付いている。 ○段落の役割とまとまり、内容をとらえる上での接続語の重要性に気付いている。

2 指導と評価の計画 (全 10 時間)

時間	学　習　活　動	学　習　へ　の　支　援	評　価　項　目
1	○読後の感想から内容を大まかにつかむ。	○分かったこと、分からないことを一項目ずつノートに書いて発表させる。 ○分かったことと分からないことを確認しやすいように分けて板書し、内容の概要をつかませる。 ○学習への意欲付けを図る。	**(関)**分かったことと分からないことを適切な表現で書き分け、発表しようとしている。

2 【見通し1】	○「説明文を読んじゃおう」作成のために読みの手引きを考える。	○既習の学習の手引きをプリントして配り、今までの学習を振り返ることができるよう丁寧に話をする。 ○書けたものから順次貼り出し、ヒントとする。 ○同様の内容をまとめ、学習のめあてになるものを選び、学習の流れ沿って整理して提示する。	**(読)** 説明文を正しく読む上で手引きとして役立つ項目を考えている。
3 4 5 6 7 8 9 【見通し2】	○「説明文を読んじゃおう」を使ってできる学習を進める。 ○四つの大段落に分ける。 ○「説明文を読んじゃおう」を活用して読む。 ○大段落ごとに中心となる段落を探す。

Ⅵ 研究の結果と考察

1 「読みの手引き」を作ることは、「広い言葉、せまい言葉」の学習の流れをつかみ、正しく読むためにはどのように読むことが必要かを考える上で有効であったか

「読みの手引き」の項目を作る時に一年生のときからの四種類の学習の手引きをプリントして参考にさせながら、丁寧に説明的な文章の学習を振り返った。これからの学習についてどんなふうに読めばよいのかを予想させ、自由に読み方を考えて短冊に書くよう指示した。

相談しながら数組が書いて黒板に貼り出すと、それを手がかりとして他の子どもも次々に短冊に書き出した。貼り出された内容とは別のことを書こうと、短冊を書き直す子どももいた。子どもたちはノートを繰ってこれまでの学習を振り返ったり、声を上げてプリントを読んだり、教材文を確かめたりしながら、説明的な文章の読み方を真剣に考えて短冊の項目を書くことができた。

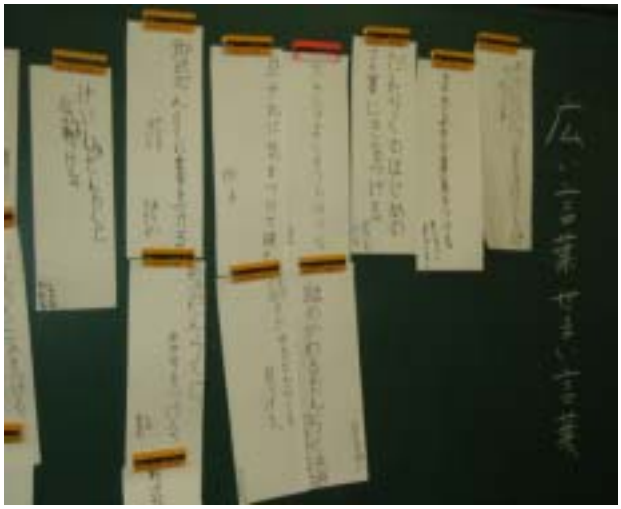
抽出児Ａは夏休み前に学習した「めだか」のときのノートを見直し、すぐに「形式段落に番号をつける」という項目を書いて黒板に貼った。

抽出児Ｂは二人組で「話の変わる段落を見付ける」という項目を短冊に書くことができた。これは、夏休み前の教材文「森のスケーターやまね」で繰り返し取り上げた学習のめあてである。

一人で一つの項目を考えることができた子どもが10人、二人組で相談して作った子どもは26人、合計で 23 枚の項目が出され、同内容のものをまとめ、12 の項目になった。これらはどれも読みの手引きとして役に立つもので、学級の全員が適切に項目作りにかかわれたと考えられる。

出された項目は「形式段落に気を付ける」「形式段落に番号を付ける」が多かった。これは「番号を付ければ、形式段落に気を付けられる」という発言で一つにまとめられた（**資料1**）。「大きなまとまりに分ける」については、「話の変わる段落を見付ける」と同じような内容の学習で、難しい学習であるという発言があったが、一つにはまとまらないということになった。形式段落に着目した項目が数多く出され、説明的な文章に対しては段落の意識をもっていることが分かった。一学期の学習で繰り返された大事な言葉や大事な段落に対する指摘も多く、既習の学習を振り返ることは重要であることが分かった。

資料1 短冊を同じ内容ごとにまとめる



さらに、既習の学習の振り返りから、「形式段落に番号を付ける」ことや「分からない言葉を国語辞典で調べる」ことは初期の段階の学習として意識された。「間違わずに音読する」ことは、学習の全過程で大切であるという意見も出された。「大事な段落を探す」「大きなまとまりに分ける」「話の変わる段落を見付ける」の項目は繰り返し読まないとできないし、簡単にはできない、ということで学習のめあてとして意識された。

このように出された項目の内容を理解して学習の流れを予想し、学習のめあてにできそうな項目を選び出すことができた。

子どもたちが手引き作りについて勉強の仕方を考えるのが面白かったという感想をもったということから、読み方に対する意識が生まれたことが分かる。

以上のことから、「読みの手引き」を作ることは、説明文の学習の流れをつかみどのように読むことが大切かを考える意識をもつ上で有効であったと考えられる。

2 「読みの手引き」を手引きとして活用することは、中心となる語や文をとらえ、内容の理解のために適切な読み方があることを理解する上で有効であったか

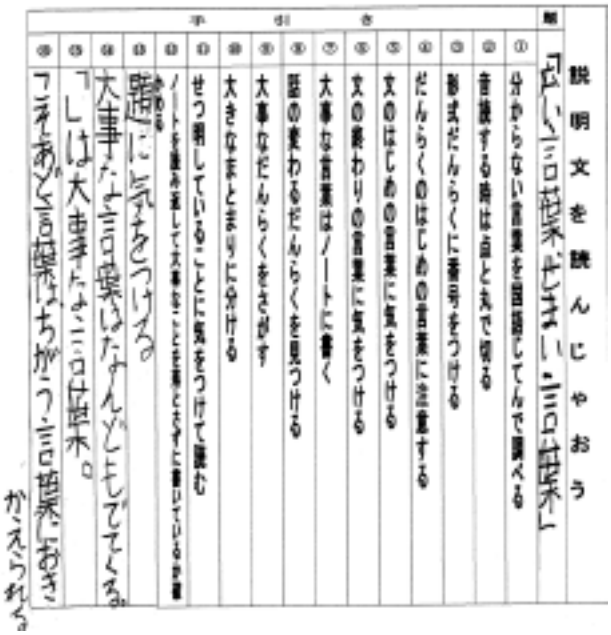
「読みの手引き」を使って「自分でできるところをやってみよう」という指示で、国語辞典を引き始めた子どもが 18 人、形式段落に番号を振った子どもが 34 人、段落のはじめの言葉に印を付けた子どもが２人であった。

抽出児Ａはすぐに形式段落に番号を付け、国語辞典で「生物」「まとめる」という言葉を引き、適切

な意味をノートに書いた。抽出児Ｂは「だんらくのはじめの言葉に注意する」ために教科書の文に線を引き始めた。振り返りに「手引きがあれば一人でも勉強できることが分かった。」と書いた子どもが７人いた。子どもたちは「読みの手引き」を使った学習に意欲的に取り組み、使っていこうという意識をもった。

大段落一の「中心となる形式段落をさがす」という学習のめあてに対しては、内容から考えて、中心となる④の段落だけに「広い意味をもった言葉」という表記があることを根拠にして、大事な段落を探し出すときの手引きとして「題に気を付ける」という項目が必要であると納得し、「読みの手引き」に書き加えた。さらに大事な言葉を探していく中でかぎかっこの言葉が大事であることに気付き、これも書き加えた **(資料２)** 。

資料２　抽出児Ａの「読みの手引き」

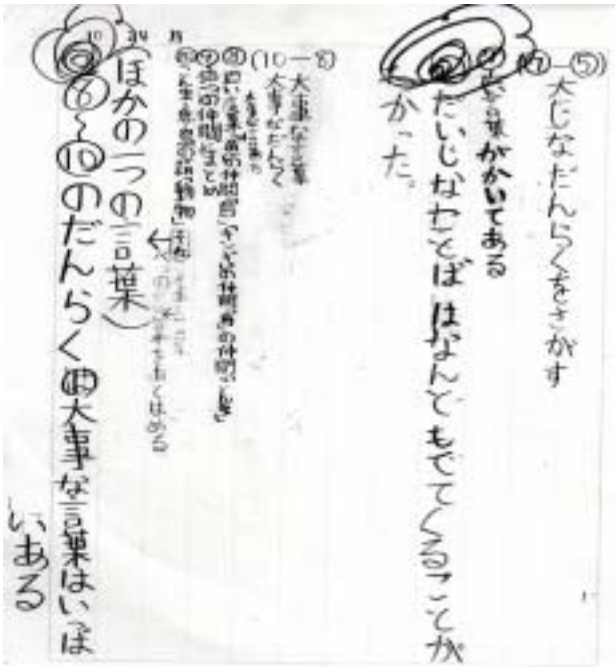


Ａは大段落三で大事な言葉を見付けるときに、かぎかっこが付いている言葉が大事な言葉だからリュウキンは大事な言葉にはならないという意見を発表した。しかし、「題は『広い言葉、せまい言葉』だからせまい言葉のリュウキンもいれなければ意味が分からない。」という子どもの発言にすっかり納得し、「かぎかっこが大事な言葉である」という項目よりも「題が大事である」という項目を優先して読むようになった。さらに、こそあど言葉が大事な内容をまとめていることにも気付き、振り返りに記述するとともに、資料２のように「読みの手引き」にも書き加えることができた。

振り返りの記述には「題に気を付けたほうがいい」「大事な段落を探すとき、かぎ括弧の言葉が大事だった」「国語辞典を引くことはとても大切」など、子どもたち全員が簡潔な表現で手引きの有効性について書いていた。問題提起の文に気付いて、その後の筆者の考えや重要性について書いた子どもも多かった。しかし「生物が一番広い言葉だと分かった」のような内容にかかわる記述は大変少なかったことから、子どもたちが読み方を意識して学習していたことが分かる。

Ａは「国語辞典にはいろいろなことが書いてある」「題はやっぱり気をつけたほうがいい」「問題はやっぱり大事」「こそあど言葉は大事」「大事な言葉が全部入っているだん落は大事」「大きなまとまりの４番目のところにはまとめが出てくる」という振り返りを書いた。適切に記述された内容で、学習の流れをつかんでいることが分かる。

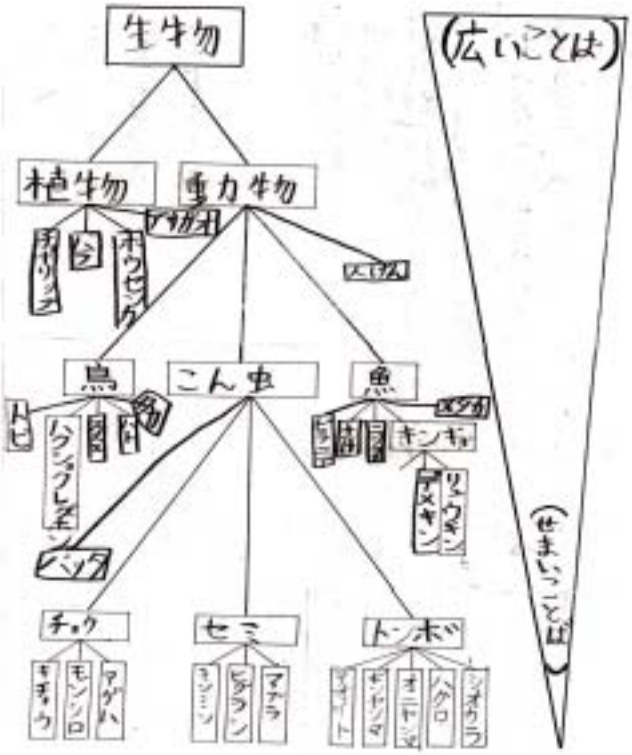
資料３　抽出児Ｂの振り返りの書かれたノート


⑤ 大じなだんらくをさがす
かいてある
だいじなことば はなんでもでてくることが
かった。
(10) 一 ⑧ 大事なこと言葉
大事なだんら
⑨ 広い言葉せまい言葉「やっぱり題の中の中の中の中」
⑩ 中の中の中の

るようになり、思い付きの意見がほとんど出されなくなった。このように、子どもたちは「読みの手引き」を使うことで、拠り所を得て自信をもち納得して読めるようになったと考えられる。

また、学習のまとめとして大段落ごとに、読み取った言葉の関係を書き込んだ広い言葉とせまい言葉の関係を記すワークシートには全員が正しく書き込むことができた。題材文に例示されていない言葉も適切に書き込むことができた子どもが多かった(**資料 4**)。 子どもたちは「広い言葉せまい言葉」の内容を正しくとらえながら読み方を考えることができた。

資料4　抽出児Bのワークシート(言葉の関係図)



以上のことから、手引きを活用することは、中心となる語や文をとらえ、内容理解のために適切な読み方があることを理解する上で有効であったと考えられる。

3　「読みの手引き」の項目からめあての解決に有効だったものを選択し、学習の流れに沿って整理することは、説明的な文章を正しく読む力をはぐくむ上で有効であったか。

まとめる過程として、自分の振り返りの記述を基に、学習のめあてとした①「大段落に分ける」②「大事な段落を探す」③「形式段落の役目を考える」の達成のために役立った手引きをまとめた。つかむ過程と同様の方法で行った。まず自分のお勧めの手引きを一つだけ短冊に書いて、当てはまる学習のめあてごとに分けて貼り付けた(**資料5**)。

その際学習を登山に見立てて、学習の流れと難易が意識できるよう工夫した。たくさん貼られた短冊を、同様のものをまとめて学習の流れに沿って黒板に整理した。黒板に貼られたたくさんの短冊を参考にしながら、自分のオリジナルの「広い言葉せまい言葉」「登山地図」としてワークシートに書き込んだ。

資料5　活動の様子

子どもたちは喜んで作業に取り組むことができた。すぐにお勧めの手引きを書いて黒板に貼り出した。数名は貼り出されていないものを書こうと２枚目を書いて出した。このとき自分のお勧めの手引きにあてはまる学習のめあてが①なのか②なのか③なのか決めることに迷った子どもが多かった。一つの手引きが複数のめあてに対して有効であるためにどれを選ぶかが難しかったのである。このとき、学習のめあてと手引きの関係について考え直し、しっかり意識することができた。

完成した「登山地図」の「大段落に分ける」に対して適切な手引きを書き込めた子どもは 26 人である。今回の授業で繰り返し行われた「大事な段落を探す」学習のめあてに対しては、31 人が適切な手引きを記入した。三年生としては難しい内容であること、初めて取り組んだ学習であることを考えるとよい結果である。「形式段落の役目を考える」に対して適切な手引きを記入できた子どもは 10 人だけだったが、これは段落の役目を考える学習そのものが初めてのことで、抵抗があったこと、扱った時数が少なかったことによると思われる。

抽出児Ａは三つの学習のめあてに対してすべて適切な手引きを記入することができ、学習に対しても「手引きをつかうと分かる」という感想を書いている。(**資料 6**) 形式段落の役目を考えるというめあてに対しては「文の終わりの言葉に気をつける。」「文の始めの言葉に気をつける」と書いた。この項目は授業では取り上げて指導ができなかったものであるが、接続語や文末の表現から役目に気付くことができた。このように、Ａは説明的な文章の学習で「読みの手引き」の利用法を理解したと考えられる。

資料6　抽出児 A のワークシート

抽出児Ｂは五つの手引きを全部書くことはできなかったが、支援なしで適切なものを二つ書くことができた。感想としては、「手引きが難しいけれど分からない言葉を国語辞典を引くと分かるよ。」と書いていた。「読みの手引き」を利用して読むことは難しいと感じているようであるが、形式段落と国語辞典の利用については意識付けられた。

このように「読みの手引き」を理解して使えるようになるためには、「大事な段落を探す」など、一つの学習のめあてに対して、複数の手引きを使う授業を、繰り返すことが有効であることが分かる。

学習の全体の感想には「手引きが役に立つ」「勉強が面白かった」などプラスの印象を書いた子どもと「題名に気をつけるといいよ。」のようにお勧めの手引きを書いていた子どもがほとんどだった。子どもたちの手引きについてのマイナスの感想は「段落の役割を考えるのが難しかった」など、４人だけだった。「読みの手引き」を使う学習は子どもたちにとって初めての形態であり、読み方を意識しながら内容を理解していく学習になる。子どもは難しいと感じながらも、興味をもって意欲的に楽しく取り組むことができた。

以上のことから、「読みの手引き」を学習の流れに沿って整理することは説明的な文章を正しく読む力をはぐくむ上で有効であったと考える。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　既習の学習を丁寧に振り返り、子どもたちが「読みの手引き」を作ることで、読み方の視点をもち学習を予想することができるだけでなく、意欲的・自主的に学習を進めることができた。子どもたち自身が何を学習したいかを考えることが、主体的に学習しようという気持ちを生み出したと考えられる。

○　「読みの手引き」を手元に置き、手引きとして活用することや、新たに手引きとして書き加えることは、子どもたちにとって大変興味を引くことであり、学習を進める上で拠り所となるものであった。適切な手引きを選んだり付け加えたりすることや、振り返って記述することを繰り返すことで、「読みの手引き」を使って読むことは学習のめあての達成に役立つことが分かっていった。

○　まとめる過程での手引きの整理については、次の学習を視野に入れるなど、子どもたちにとってより必然性のある学習活動に改善していく必要がある。さらに、説明的な文章の学習形態として、低学年から高学年まで積み重ねていくことができるかどうか研究を重ねていきたい。

〈参考文献〉

・大村　はま/苅谷　剛彦・夏子　著　『教えることの復権』　　筑摩書房(2003)
・須田　実　編著　『読む力・考える力を育てるノート指導』　　明治図書(2004)